上野原市立上野原西中学校二年 宇津木 さら

「ありがとう。|

その一言だけで、自分が相手のために行ったことが報われる気がする。しかし、その一言すら返ってこないとき、心にぽっかりと穴が空いたような気持ちになり、自分は無意味なことをしたのか、相手への想いが空回ってしまっているのではないかと、どうしても不安になってしまう。

突然、仲の良い友達に

「絆創膏、持っていたらもらえないかな。指に怪我しちゃったんだ。」 と頼まれた。私は人に頼られるのが好きだ。だから快く絆創膏を差し出した。 すると友達は何も言わずに受け取り、黙々と指に絆創膏を巻き始めたのだった。 部活動でも似たようなことがあった。

私はバレー部に所属している。練習中、自分のボールが他の人に向かって飛んでいってしまうことはよくあることだ。実際、私のもとにボールが飛んできたとき、キャッチして相手に返してあげた。しかし、相手は何も言わずに練習に戻っていった。

これらの出来事は、ほんのささいな出来事だ。しかし、仲の良い友達だから こそささいなことでもお互い良い気持ちでいたい。部活動だからこそささいな コミュニケーションを取ることが大事だと思うのだ。

「ありがとう」の一言で、人の行動は大きく変わる。自分の行動が報われた ことで次につなげようと思うからだ。

「絆創膏、くれてありがとう。」と言われたら、次は柄つきの絆創膏をあげたくなる。

「ボール、取ってくれてありがとう。」と言われたら、次は少し自分の遠くにボールが飛んでいっても、取りに行ってあげたくなる。

このように、更に工夫して、もっと相手に喜んでもらいたいという意思が強くなるのだ。また、一人に喜んでもらえたことを、他の人にもやってあげたくなる。そして親切にされた側は親切を返したくなる。

ほんのささいな出来事の、ささいな一言で親切の連鎖が始まる。「ありがとうの輪」が広がるのだ。

逆に自分は相手にありがとうと言えているのだろうか。立ち止まって考えて

みると、もしかしたら他のことに夢中になっていたり、ぼーっとしていたりして、言えていなかったことがある可能性も否定できない。

しかし、この可能性を考えられたことは、良いことだと思う。自分を見つめ 直すことができ、今まで以上にありがとうと言う意識が高まり、親切の連鎖に もつながるからだ。

これについては、誰しも一度は考えてみてほしい。とはいえ、過去にありがとうと言えてなかったことに気づいたとしても、負い目を感じないでほしい。ただ、今までの自分と向き合い、これからの自分に託すのだ。そしてありがとうと言う意識が高まると、「言おうとしていた」ありがとうが、「言いたい」ありがとうに変わっていく。言うのが自然になってきて、意識せずとも心からのありがとうがあふれてくる。これこそが濁りの無い、純粋な「本物の」ありがとうだと私は思う。

最初は形だけでも、すぐに本物になる。そう信じて「ありがとうの輪」をみんなでもっと質の良いものにしていきたい。

なぜ、私が「ありがとう」を大切にするのか。その理由は小学校一年生のとき、担任の先生から受けた言葉にある。

「さらの『ありがとう』は、魔法の言葉だね。」

当時の私は、ただ思うままに相手へ感謝の気持ちを伝えていただけだったため、そのようにほめられて驚いた。それまで自分の「ありがとう」に価値など感じていなかったが、急に誇らしくなった。同時に、これからも自分の「ありがとう」を大切にし、続けていこうと思った。

今思えば、当時の素直な気持ちをまっすぐ伝える、という純粋さがあったからこそ私の「ありがとう」は、「魔法の言葉」だったのかもしれない。

今の私はどうだろうか。上辺だけだったり、計算をしてしまったりしていないだろうか。

自分の「ありがとう」の純粋さについて、改めて考えてみようと思う。

「ありがとう。|

もしかしたら言わなくても、言われなくても最低限生きていけるかもしれない。 一方的に親切にし続けるだけでも良いのかもしれない。

しかし私たち人間は生きていく上で幸せを求める。そしてその権利がある。 「ありがとう」というほんのささいな一言が幸せにつながる。だから私たちの 権利を損なわれないためにも、「ありがとうの輪」を広げていくことは大切なこ とであり、そこに「幸せ」という生きる意味があるのではないかと思うのだ。